解説ハリストス教信仰 (I)

木村 真之介

2026.1.3

概要

ギリシア正教とかロシア正教とかで知られる正教会（せいきょうかい）＝オーソドックスの教会の信仰についての簡易な解説です。ハリストスとはキリストを意味します。つまりこの文書にはキリスト教に関することが書かれています。

聖ソフィア、ウェラ、リュボフ、ナデジタ

・・・地獄よ、爾の勝は安にか在る。ハリストス復活して、爾は墜ちたり。ハリストス復活して、悪魔は仆れたり。ハリストス復活して、天使等は歓ぶ。ハリストス復活して、生命は凱旋す。ハリストス復活して、死者は一も墓に在らず。蓋しハリストス死より復活して、死せし者の中に初実と為れり。彼に光栄及び権柄は世々に帰す、「アミン」。

–我が聖神父コンスタンティノポリの大主教イオアン金口の
ハリストス我が神の至栄なる復活の光明の日の説教より

0.1 まえがき

ハリストスとはおよそ 2000 年前に人類を救うために天より降り聖神[*1]によって童貞女マリヤより生まれた、人となった神です。なにから救うのかといえば死から救うのです。永遠の死から永遠の生命に移すのです。私達はハリストスと共に死に、ハリストスと共に復活して永遠に生きるものとなるのです。

ハリストスとはエルリンやスラブの言語でキリストのことですが、この文書では敢えて「ハリストス」と「キリスト」の両方の言葉を用います。異なる用語体系に慣れ親しんで、ある程度は自由に頭を切り替えられるようになった方が結局、便利なので慣れ親しんでください。

現代の日本社会で救いや霊的慰安を求める人々にとっては、混迷を深めるキリスト教の状況は迷いを生じさせるものです。つまりキリスト教の本質が見えにくくなっています。だからこそ、温故知新のハリストス教が役にたつでしょう。

英語でorthodoxとは正統的とかの意味の他に大文字ではじまる場合には

*1 一般では「聖霊」と呼ばれる。

「ギリシア正教」とか「正教会」という意味もあります。語源はエルリン語のオルソ (正しい) とドクサ (讃美・礼拝・真理・教え) です。オーソドックスの信仰について学ぶことは、真に伝統的かつ正統的な教会を知ることです。歴史的な経緯や自分の信仰の源泉について思案する機会となり得ます。つまり他教派の人にとっては正統との差異を理解することで自身の信仰を確かめる機会となりえます。

ハリストス教に関心のある人のため、また、救いを求める全ての人のために、手短にハリストス教について解説する目的でこの文書を作成しました。また、ハリストス教について知りたい人のために、なるべく最初の章だけでハリストス教とは何かを簡易に知ることができるように配慮しました。

神品 (聖職者) は重い責任が伴うため執筆活動には慎重です。しかし筆者はただの一般信徒です。ある意味無責任に好き勝手に執筆できる立場にあります。そこで可能な限り良心的に、そして自由に、ハリストス教について解説します。

日本に正教会の信仰を伝えた宣教師聖ニコライは日記の中で、日本でハリストス教に関心を持つ人々は、その人生において様々な不幸なできごとなどを経験し、心を強く揺さぶられた人がほとんどであると書いています。[*2]これは現在でも同様と思われます。そのような人々にも読んでいただき参考にしていただければ幸いです。

この文書の最新版は下記 URL を参照してください。

https://orthodox.jp/eks/

この文書に関する問い合わせ先

X(Twitter): @shin314159

E-mail: E.Kimura.S <shin314@gmail.com>

[*2] 「ニコライの日記」(中)[全三巻] の 1897 年 (明治 30 年)1 月 15 日の日記より。

目次

0.1 まえがき 3
0.2 はじめに 6
0.3 神はどのようなお方か 6
0.4 ハリストス教とは何か 7
0.5 天地創造から罪と救いまで 8
0.6 基本的な用語・概念・信仰 13
0.7 ニケア・コンスタンティノポリ信経 20
0.8 おわりに 23

0.2　はじめに

ある神品(しんぴん) (聖職者) は、ハリストス(キリスト)教について説明する際、はじめに「神はいる」ということが大前提であると教えていました。私達は「神はいる」という前提がなければハリストス神について知ることはできません。そして人間に理解可能な神であればそれは神ではありません。神は人間の理解を超えたお方だからです。

0.3　神はどのようなお方か

ここでは、この神品に倣い、8 世紀頃から 9 世紀にかけてハリストス教を混乱させた聖像破壊運動(せいぞうはかいうんどう) (イコノクラスム) への反論で有名な 8 世紀の聖人ダマスクの聖イオアンの解説を参考に説明を試みます。[*3]

神は限りなく善なる存在[*4]です。大きさもはかり知れず、決まった形もありません。変わることはなく、なんらかの合成物ではなく複雑なものではなく究極的に単純です。どんな基準 (尺度、ものさし) でも測ることはできないが、神ご自身の意思によってのみ測ることができ、また、全てのものを保持し、傷ついたものを癒すものであり、失われたものを回復するものであります。霊的で、善であり、福であり、豊かであり、仁慈であり、明るく照らすものであり、教導するものであり、聖でありこの世の始まる前から存在し、存在しなかったことは過去も現在も未来もありません。神の存在しないところはありません。また、全知全能です。知らないことはありません。できないこともありません。人間の論理では「神は自分で持ち上げることのできな

[*3] このダマスクの聖イオアンの解説については、筆者が耳で聞いた記憶を頼りに、またいくつかのトラクトを参考にアレンジしたものです。聖イオアン本人の解説とは異なるはずなのでご注意ください。

[*4] 正教会は否定神学的だと言われますが「神は善ではない」として善という語句にとどまらない大きいお方であると理解する傾向があるようです。

い重たい石を作れるか？」というパラドックスのような問いかけも可能ですが、神を信じる人々の立場からすれば、このような問いは屁理屈に過ぎません。そして不在のところがないものであるがゆえに不動のものであります。

神は全知全能であるばかりか、過去も今もこれからも、生きておられる神です。死んだ、あるいは死んでいる神ではありません。常に生きています。

神はこの世の全てを無から創造しました。はじめに材料があって、その材料を元にこの世界をつくったのではなく、完全に何も無い状態から、この世界のすべてをつくりました。

また、神は人格的な存在であり、この世の全てのモノをよいものとしてつくられました。そして、ご自身がおつくりになった万物を愛しておられます。神は全能であるがゆえになんでもできますが、なんでも望んでいるわけではなく、たとえば神は世界を破滅させることも可能ですが、それを望まないでしょう。

神は人格的なお方であり、善なるお方であり、全能者であり、この世を愛する神です。もしこの世が悪に満ちており、救いを必要としているならば、神は必ず救うお方であります。

0.4 ハリストス教とは何か

キリスト教徒、すなわちクリスチャン[*5]の信仰を大雑把に説明すると、父と子と聖神の三つでひとつの神、至聖三者を唯一の神として崇めている世界的な宗教の一つです。およそ 2000 年前にイエス・キリストによって、神と人との契約が更新されました。ハリスティアニンはハリストスについて行くことに決めた人達のことで、今風に言い換えればハリストスのフォロワー

[*5] ロシア語でハリスティアニン (христианин) は男性形単数なのだが日本ハリストス正教会では慣例的に男性も女性も複数も全部まとめてハリスティアニンといっています。正教会の信徒という意味であれば正教徒ともいいます。なお女性形ではハリスティアンカ (христианка)、複数の場合はハリスティアニェ (христиане) となります。

です。

0.5　天地創造から罪と救いまで

ハリストス教の世界観、天地創造から罪による死と罪の赦(ゆる)しという救い、そして復活、永遠の生命(いのち)について解説します。

0.5.1　天地の創造

聖書によると、この世は、全能者である神によってつくられました。つくられたものを被造物(ひぞうぶつ)といいます。人間は神によって特別につくられました。他の被造物(ひぞうぶつ)とは違い、人間は神の「かたち」即ち像(ぞう) (エイコーン/image) と「かたどり」即ち肖(しょう) (ホモイオーシス/likeness) に従ってつくられました。そして鼻から「神の息」(神(しん)) を吹き込まれ、生きるものとなりました。これは人間が被造物の中でも特別な存在であることを意味します。

つくられたものは全てがはなはだよいものでした。ハリストス教つまりキリスト教は性悪説と思われがちかもしれません。しかしながら最初から悪に満ちていたわけではないので、性善説なのか性悪説なのかを単純に論じることはできません。

天地の創造において、「天」は神や天使たちの世界、霊的な世界です。「地」はこの世、人間の知ることのできる[*6]物質的な世界のことです。天は限りなく広く、地には限りがあります。天使たちは、神の命令を実行する無形の者たちで、様々なランクがあります。天使の数は無数でとても多いです。天地の創造の時、神に反する天使がいました。なぜなら天使には自由な意志が与えられていたので神に反することもできたのです。この神に反する天使が悪魔と呼ばれるようになりました。天の世界は私達の世界の時間の進み方とは

[*6] 人間は肉体の部分と霊的な部分の両方を持っているので、天と地の両方に属しているともいえます。

異なります。天は創造されたと同時に一瞬で天使と悪魔は分かれたと言われています。そして一度悪魔になった天使達は永遠に悪魔のままであるというのです。つまり肉体と限られた時間を持つ人間のように悔い改めることはできません。

そうして、天使等に自由な意志が与えられたのと同様に、人間にも自由な意志が与えられました。これは人間が自発的に善を選択できるようにするために、神から与えられた賜物でした。また、神は人間を男と女[*7]につくられました。そして男女が結ばれることを祝福しました。人間は楽園を管理する役割を与えられました。

0.5.2 陥罪（かんざい）

最初の人は神と共に楽園にありました。そこにはまだ死というものがありませんでした。つまりハリストス教においては、死というものは不自然な状態を意味します。人は楽園に生えている木の実を自由にとって食べることが許されていました。ただし善悪を知る木の実だけは食べてはいけないと神は人に命じました。そして食べたら死ぬものとなると神によって予め戒められていました。さて、蛇は最も狡猾（こうかつ）で悪魔の化身（けしん）でした。この悪魔にまず誘惑されたのは女でした。悪魔つまり蛇は女を言葉巧みに誘惑して禁じられた実を食べさせることに成功しました。そして女は夫である男にも食べるように勧め、男は食べました。神が彼等を呼んだ時、彼等は畏れて隠れます。存在しないところはなく知らないことのない神から隠れるというのは無駄なことなのですが、彼等は自分が神の戒めを守らなかったことを知っていたので隠れてしまいました。彼等は隠れるのではなく、おかした罪を顧みて、神に赦

[*7] 性的少数者 (セクシャルマイノリティー) を念頭において、正教会においても神は男と女以外の性をつくっていないので、男女以外の性を認めないという意見が強いかと思います。たとえば正教会における結婚 (婚配機密) は男女以外の組み合わせでは認められません。しかしながら、「アダムはいつから『男』になったのか？それは『女』がつくられたときである」という意見も傾聴すべきと思うので注に残します。

しを請うべきでした。しかし、男は自分の罪を女のせいにし、女は蛇のせいにし、責任転嫁をはかり、神の赦しを拒む結果となりました。この罪によってこの世に死というものが入ってきたのです。はなはだよいとされていたこの世界は変わります。死、病、苦労、不幸、不条理、理不尽、矛盾、あらゆる悪がこの世に入ってきたのです。

罪の結果は死です。神があらかじめ戒(いまし)めていたように、人は善悪を知る木の実を食べたことで死ぬものとなりました。死は人間にとって不自然な状態です。人類最大の敵は死です。

0.5.3 死からの救い

救いとはなにかといえば、死からの救いです。永遠の死から永遠の生に移すことです。[*8]これは神の恩寵によって可能です。すなわち神を信じ、想いと行いにおいて、悪から善に、悔い改めることで、救いを得ます。

具体的には、神を、ハリストスを信じて、洗礼と呼ばれる儀式を受け、聖体(せいたい)・聖血(せいけつ)と呼ばれるハリストスの体血に変化した特別のパンとぶどう酒を飲食[*9]することで救いを得ます。また、洗礼後に罪をおかしたならば、司祭の立ち会い[*10]のもとで神の前[*11]でおかした罪を告白をすることで罪の赦(ゆる)しを得ます。罪が赦されたらハリストスの体血(たいけつ)である特別のパンとぶどう酒を飲食します。そうして死後、この世の終わりに復活し、最後の審判においてよき裁きと永生が約束されます。

これはとても単純で興味深い話です。最初の人、アダムとエワが善悪を知る木の実を食べることによって死ぬものとなったように、私達

[*8] 永遠に神と断絶した状態から、神との親しい永遠の交(まじ)わりを回復することです。

[*9] この特別なパンとぶどう酒を飲食することを領聖(りょうせい)といます。

[*10] 主教によって任命された司祭には人の罪を赦す権威がある。

[*11] 痛悔機密においては福音書と十字架をアナロイ (読経用の台) に置いて、その前で罪の告白をします。福音書の表紙には神(かみ)ハリストスのイコンがかたどられています。

ハリスティアニン(クリスチャン)はハリストス(キリスト)の体を食べることによって死から救われ永生を得るのです。

以上がハリストス教における救いについての手短な解説です。とても単純です。

0.5.4　何故ハリストスは我等を救い得るか

それでは何故ハリストスを信じることで人は救われるのでしょうか。それはまことの神だからでしょう。極端なことを言ってしまえば神がそのようにすると決めたから救われるのですが、それでは乱暴なのでもう少し考えて行きましょう。

人の罪はとても多く重く、人は自分自身ではこの罪を贖(あがな)うことができませんでした。そこで神は、神ご自身が人間となって、人となった神ご自身が和解の捧げものとなることで人類を救うという偉業を成し遂げられたのです。

神ご自身が完全に人間と成ったことで、つまり肉体においても精神においても完全な人間と成ったことで、完全な救いが可能なのです。もし肉体や精神の一部分だけが神であったとするならば、その部分だけは救われないということになってしまうからです。

救いとは最初につくられたときに人間が持っていた、しかし罪によって損傷したり失われてしまった神の像と肖の回復を意味します。罪の赦しは罪によって失われたものを取り戻すために必要な条件と言えますから罪の赦しそのものが最終的な目的ではなく、本来の人間の姿を取り戻すこと、神との真の交わりを回復させることが救いなのです。

ハリストスが来られる前、神に選ばれた民、イウデヤ(ユダヤ)人たちは罪をおかさないように律法とよばれる規則をまもること、節度ある生活を送るのに一生懸命でした。たとえば罪をおかした場合に和解の捧げものとして動物を捧げ

ていました。[*12]そして、彼等イウデヤ人達は預言されていた救世主、メシア、ハリストスを待ち望んでいました。そうして今からおよそ 2000 年前にハリストスが来たのです。

イウデヤ人達はローマ帝国の支配から解放してくれる力強い王としてのハリストスを期待していましたが、ハリストスは決して力強いこの世の王ではなく、小さき者としてこの世に現れました。その役割は、彼自身を十字架上でその父なる神に献じ、和解の捧げ物とすることでした。これによって彼を信じる全ての人が救いを得ることができるようになったのです。これが新しい新約の時代の誡めです。もはやイウデヤ人達のように律法をまもることではなく、ハリストスを信じる信仰によって救いを得るのです。[*13]

では信じない人はどうなるのでしょうか。[*14]人には自由意志があるので、神の差し伸べる手を拒絶することも可能なのです。もし私達が自由意志を持たない存在であるならば自発的な選択をし得ない者となったでしょう。おそらくそのような世界には罪もなければ救いもありません。しかし、私達の住む世界は人間には自由意志が与えられ、自発的に善なる神を選択することを神は待ち望んでおられるのでしょう。

また、ハリストスは全ての人を救いに招きました。

> 口語訳
>
> イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、 あなたがたに命じておいたいっさいの

[*12] 新約の現代では動物ではなくパンとぶどう酒を捧げます。

[*13] ハリストスの降誕 (藉身)・十字架 (死と陰府への降下)・復活 (死・悪魔への勝利) の一連のできごとが人類の救済を可能にしたのです。

[*14] 信者でない者、オーソドックスの信仰を持たない者、異端者、離教者、他教派、他宗教、無神論の者などの救いについて、穏健派は「救われうる」と考えますが、筆者は穏健派の姿勢はやや無責任であると考えており、救われ得ないという立場です。

ことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。（マタイによる福音書 28:18-20 口語訳）

正教会訳
イイスス就きて、彼等に語げて曰へり、天に在り地に在る一切の権は我に与られたり、故ゑに爾等往きて、万民に教へを伝へて、彼等に父と子と聖神°との名に因りて洗を授け、彼等を教へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、視よ、我恒に爾等と偕にして世の終末まで在るなり、アミン。（マトフェイに因る聖福音 28:18-20）

これは、イウデヤ人に限定した救いではなく、アダムの呪いを受け継いでいる死から逃れることのできない全ての人を救うものでした。そればかりか「神が人となったのは人が神となるためである」[*15]とさえ言われます。これは神の肖と像の回復を意味し、神成 (神化、テオシス)[*16]が可能となります。これはすなわち私達は神と一体になれるということです。この救いの喜び、よき知らせ、福音を全世界に伝え知らせるのがハリストスの弟子達つまり聖使徒達に課せられた使命だったのです。つまり聖使徒達の働きで、今日私達はハリストスのことを知ることができたのです。

0.6 基本的な用語・概念・信仰

ニケア・コンスタンティノポリ信経と呼ばれるハリストス教の基本信条を中心に、基本となる用語や概念について解説します。

---

*15 4 世紀の聖人、聖大アファナシイ (アサナシオス)

*16 テオシスはエルリン語のテオ (神) とオシス (状態、身分) からなる用語で、人間が神の像と肖を回復し限りなく神に似たものとして神に近づき続ける状態を意味します。

0.6.1　信経の解説

ここでは先に、ニケア・コンスタンティノポリ信経の本文を引用し、続けて解説をします。

父なる神

「我信ず、ひとつの神・父・全能者、天と地、見ゆると見えざる万物をつくりし主を」

父なる神とは、全能者、天と地、みえるものとみえないもの全てのもののつくり主です。創造主、発出者、原因者であります。

最初が「我等信ず」ではなく「我信ず」で始まるのもポイント[*17]です。信仰は個人と神の一対一の関係から始まり、信じて洗礼を受けて信者となった者は信仰共同体に入り、そして「天にいます我等の父」というように「我等の」と呼びかけます。

ハリストス

「また信ず、ひとつの主、イイスス・ハリストス、神の独生の子、万世の先に父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、生まれし者にてつくられしにあらず、父と一体にして万物彼につくられ、我等人々のため、また我等の救いのために、天より降り、聖神°および童貞女マリヤより身を藉り人となり、我等のためにポンティ・ピラトの時[*18]、十字架に釘うたれ、苦しみを受け葬られ、第三日に聖書に叶うて復活し、天に升り父の右に座し、光栄を顕して生ける者と死せし者を審判するためにまた来たり、その国、終わりなからんを」

[*17] 「正教会の手引」38 ページ、トマス・ホプコ神父の説明として書かれている。また、「正教要理」27 ページ、同様の解説がある。

[*18] ローマ帝国のユダヤ地域の総督の名前。在位西暦 26〜36 年。

子なる神、イイスス・ハリストスについての説明です。イイススは人名です。ハリストスは救世主を意味します。そして、イイスス・ハリストスは人となった神です。神の独り子です。全ての世界に先駆けて父なる神から生まれます。父から生まれなかった時はなく、父によってつくられた被造物ではありません。真(まこと)の神です。なんらかの被造物によってつくられたのでもありません。父なる神と一体、ホモウシオス、同一本質といいますが、全てのものは父と一体の彼によってつくられました。つまり神であるイイスス・ハリストスは父と一緒に天地を創造しました。父なる神の独一子です。つまり「一つ」で独立した位格です。そして、私達人類のために、人類の救いのために「天」より降り聖神゜の力によって処女マリヤの体を借りて[*19]人間として生まれます。また私達の救いのためにポンティ・ピラトの時代、つまりおよそ 2000 年前のイエルサリムにおいて、十字架に釘打たれます。このとき彼は苦しみました。苦しんだということは完全に私達と同じように痛いし苦しいし悲しむことができるということです。これは神でありながら完全に人間になったという意味があります。そして死んで葬られました。そうして聖書に預言されていたように三日目に復活します。復活したイイススはしばらくこの世に滞在したのち「天」に昇り、父なる神の右の座についておられます。最後に、この世の終わりに栄光のうちに再臨し、生きているもの達と死んだもの達を審判します。そして、この世の終わった後に来る天の国は永遠無限の世界です。終わりはありません。

なお、ニケア・コンスタンティノポリ信経の前の古いバージョンであるニケア信経では、末尾に次の文言が付きました。

> 存在しない時があった、生まれる前に存在しない時があった、彼は無からつくられた、異なる本体あるいは本質から神の子はつくられた、変化し得る、あるいは、変えることができる、と宣べる者は、聖なる

[*19] 藉身の藉は「かりる」という意味です。

公けなる使徒の教会によって呪われる。

正教会訳
凡そ神の子に就て存在せざりし時ありと云ひ或は生まれざりし前に在らざりしと云ひ或は無より生じたりと云ひ或は他の位若くは本体より出でたりと云ひ或は神の子は變化し若くは變易すと云ふ者は公けなる使徒の教会之を「アナフェマ」に處す。

「アナフェマ」とは「アナテマ」とか「呪われよ」とか「破門」に相当する語です。正しくない教えを宣べ伝えることは教会を混乱と分裂の危険に陥れるのです。だから「呪われよ」といって排斥、拒絶するのです。時々、異端はたまたま会議の議論で負けただけでそんなに悪いものではない、などという人もいます。しかし異端とは公会議においてハリストスの臨在の元、聖神°の導きによって誤りであることが明らかにされたものです。異端は教会を混乱と分裂の危機に陥れることで人々を苦しめるとても悪いものです。既に結論が出ている問題に関して、いまさら蒸し返す必要はありません。正統信仰を守ることが肝腎です。

聖神°

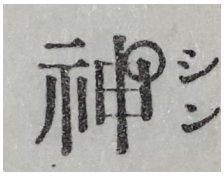
「また信ず、聖神°、主、生命を施す者、父より出で、父および子とともに拝まれ讃められ、預言者をもってかつて言いしを」

聖神°とは、主であり神であり生命[*20]を施すものです。父なる神から発出します。父なる神と子なる神と同様に神であり拝まれ讃められる存在です。旧約聖書に登場する預言者達を語らせたものです。天の王であり私達を励まします。真の神です。存在しないところはありません。欠けたところも

[*20] 正教会訳では生命を「いのち」と読んだり「せいめい」と読んだりするが、文脈によって異なるのである程度の慣れが必要ですし完璧を目指すのは難しい部分でもあります。

ありません。完全に満ち足りています。全ての善なるものの源です。生命を給う主、神です。この聖神゜は私達ハリスティアニン(クリスチャン)のところに来て私達の内に居てくださいます。私達をあらゆる罪からきよめます。至って善なるもので私達のたましいを救います。

ちなみに聖神゜の「神゜」のマルは「しん」「ドゥッフ」「プネウマ」と読ませるための記号で正式には画像のように神の右上に被せます。しかしコンピュータのフォントには無いのでここでは「゜」で代用しています。



神゜

至聖三者

至聖三者(しせいさんしゃ)。一体にして分かれざる聖三者、至って聖なる三者とは、父なる神、子なる神、聖神゜なる神の三つでひとつの唯一の神です。他に神はありません。この三者は区別はあるが分離されず、混合することもなく、一体です。信経では、「同一本質」(ホモウシオス) というエルリン(ギリシア)語が用いられています。

「父」は生まれ得ず、源泉です。「子」は父から永遠に生まれます。人となった神、イイスス・ハリストスです。「聖神゜」は父から出るものです。これらは三つの神なのではなくひとつの神です。

4 世紀頃のある聖人[*21]は、ひとつの神の三つの性質、位格を表現するのに太陽を例にとりました。即ち、父なる神は太陽、子なる神は太陽から生まれる光、聖神゜は光による温まりであると解説しました。太陽も光も熱も、そ

[*21] 3〜4 世紀の聖人、キプリアン、オリゲネス、あるいは金口イオアンなどという情報がある。

れぞれ異なる性質を持ちますが、元はひとつの太陽であるという理解です。しかし、この考え方は完全ではありません。様態論[*22]と呼ばれる異端的思想に陥るやもしれません。あくまでも例え話です。至聖三者を理解することは人間にはできません。人間の理解を超えた存在です。自分の頭で理解できる神は本当の神ではありません。神ははかりしれない存在です。

教会

「また信ず、ひとつの聖なる公(おおやけ)なる使徒の教会を」

ひとつの公の、つまり普遍の、使徒の教会とは、ハリストスの弟子達によって建立された、神に呼び集められたもの、ハリスティアニン(クリスチャン)達の集まりを意味します。使徒の教会とは聖使徒達の後継者によって連綿と受け継がれてきた信仰を守って今日に至っているという意味があります。聖使徒とはハリストスの弟子のことです。聖使徒の後継者を今日では主教と呼びます。ハリスティアニン達は聖使徒およびその後継者である主教達を深く尊敬します。そして教会はひとつでなければいけません。分派は認められません。教会はエルリン(ギリシア)語ではエクレシアといいます。これには「呼び集められたもの」という意味があります。神に集められた者達ということです。

洗礼

「我認(われみと)む、ひとつの洗礼もって罪の赦(ゆる)しを得(う)るを」

ハリスティアニンはひとつ[*23]の洗礼で罪の赦しが得られると信じます。この洗礼によってそれまでの人生でおかした全ての罪が赦されます。洗礼をう

[*22] 神はひとつで、ひとつの神がその活動の様態に応じて三つの位格が現れているに過ぎないという説。つまり、本質的には完全に一なる神であり本質的な位格の区別がなく至聖三者を否定する。「正教要理」112 ページ。

[*23] 洗礼は 1 回だけが原則です。何回も洗礼をうける必要はありません。

けた人をハリスティアニン[*24]といいます。

世の終わりと復活と最後の審判と永生

「我望む、死者の復活、ならびに来世の生命を」

この世の終わりに最後の審判があります。死者はまず私審判というもので裁かれます。そして世の終わりに生者と死者を裁く最後の審判があります。全ての死者が復活します。神の裁きは間違いなく正しいです。生前の自分の行いを正しく評価されると思えばよいでしょう。それでも恐るべき審判であることに変わりありません。天国と地獄などと言われますが、ある司祭の解説によれば、人は死んだら皆、神のところへ行き、神から出る光を浴びて、心地よいと感じる人と辛いと感じる人がいるということです。

筆者の理解では、地獄とはおそらく永遠に神と断絶した孤独な希望の断たれた暗い苦しみの状態と思われます。対して天国は永遠に神との交わりがもてる幸福で明るい喜びのうちにある状態と思われます。

ハリスティアニンは、いわゆる天国で永遠の福楽にあずかることができるという希望を持って生涯を終えると理解してください。[*25]

アミン

「アミン」は「本当です」「その通りです」「まことに」「確かに」など「同意」をあらわす言葉です。祈りの最後に唱えることで祈りの内容が確かであることを確認します。

[*24] 正教会ではないローマ・カトリック教会で受けた洗礼はそのまま正教会でも有効なので再洗礼とはなりません。プロテスタントの教会でも父と子と聖霊の名前で受けた洗礼は有効な場合が多いです。つまり帰正者は洗礼をうけ直す必要がありません。

[*25] 死後の福楽だけを目指しているのではなく、生きている間に神に近づき続けることができるという理解も大切です。これは日々の生活で祈りや聖体礼儀をとおして実現することが可能です。

0.7　ニケア・コンスタンティノポリ信経

　最後にニケア・コンスタンティノポリ信経をまとめて読みましょう。明治期の初期のバージョンと現行バージョンがあります。

聖使徒規則より
コンスタンティノポリ第二全地公會百五十人の諸聖父の
信經

　我信ず一の神父・全能者・天と地・見ゆると見えざる萬物を造りし主を。又信ず一の主イイススハリストス・神の独生の子・萬世の前に父より生まれ・光よりの光・真の神よりの真の神・生まれし者にて造られしに非ず、父と一躰にして萬物彼に造られ我ら人々の爲め又我等の救ひの爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り人と爲り我等の爲にポンティイピラトの時十字架に釘うたれ苦を受け葬られ第三日に聖書に應ふて復活し天に升り父の右に坐し光栄を顕はして生ける者と死せし者を審判する爲に還た來り其國終りなからんを。又信ず聖神・主・生を施す者、父より出て父及び子と共に拝まれ讃められ預言者を以て嘗て言いしを。又信ず一の聖なる公なる使徒の教會を。我認む一の洗禮以て罪の赦を得るを。我望む死者の復活並に來世の生命を。アミン。

現行のバージョン

我信ず、ひとつの神父、全能者、天と地、見ゆると見えざる万物をつくりし主を

また信ず、ひとつの主、イイスス・ハリストス、神の独生の子、万世のさきに父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、生まれし者にてつくられしにあらず、父と一体にして万物彼につくられ、我等人々のため、また我等の救いのために天より降り、聖神および童貞女マリヤより身をとり人となり、我等のためにポンティ・ピラトの時、十字架に釘うたれ、苦しみを受け葬られ、第三日に聖書にかなうて復活し、天に升り父の右に座し、光栄を顕して生ける者と死せし者を審判するためにまた来たり、その国、終わりなからんを

また信ず、聖神、主、生命を施す者、父より出で、父および子とともに拝まれ讃められ預言者をもってかつて言いしを

また信ず、ひとつの聖なる公なる使徒の教会を

我認む、ひとつの洗礼もって罪の赦しを得るを

我望む死者の復活、ならびに来世の生命を　アミン

信経 (クレド) とは、ロシア語などではシンボル・ヴェリ (Символ веры) すなわち信仰のシンボルといいます。また、シンボルはエルリン語の「シン」(一つにあわせる) と「ボロー」(投げる、置く、納める) から来ています。字義的には「二つを一つに合わせる」という意味ですが、信仰に関しては「表

現」とか「表明」といった意味を持ちます。[*26]

[*26] 「正教要理」26 ページ。

0.8　おわりに

0.8.1　編集履歴

解説ハリストス教信仰 (I)

v1.0 ・・・2023.08.26

v2.0 ・・・2024.06.24

v3.0 ・・・2025.12.29

v3.2 ・・・2026.1.3

この文書の最新版は下記 URL を参照してください。

https://orthodox.jp/eks/

0.8.2　製作・著作

エフレム木村真之介 (E.Kimura.S)

連絡先

X(Twitter): @shin314159

e-mail: shin314@gmail.com